是川中

基礎・基本を身に付け、主体的に学ぶ生徒の育成
～生徒の意欲と必要性を引き出す課題設定の工夫～

（３年計画の１年次）

校長　　鎌田　康由

１　研究主題について

本校の学校目標は、「夢と志をもち、未来に向かって学び続ける生徒の育成」～キャリア学習の充実を通して～である。それを具現化するための重点的施策の１つとして、ひとりひとりの生徒が「授業がわかる、楽しい」と実感でき、自分から学習に取り組むことができる授業づくりを行うことを掲げている。しかし、昨年度の学校評価アンケートにおける生徒の自己評価を見ると、学習に対して受け身の傾向が強く、主体的に学んでいるとはいえないことが分かった。また、本校が以前から抱えている課題として、発達障害やそれに類した特性を示す生徒が年々増加しており、学ぶことに困難を感じている生徒が少なくないこと、苦しいことや辛いことへの耐性が弱く、頑張りがきかない生徒の割合が高いことなどが挙げられている。従って、昨年度まで実践していた特別支援教育の視点に立った生徒理解と、授業のユニバーサルデザインによる分かる授業づくりを継続するとともに、問題解決学習を積極的に取り入れることで、能動的に学習に取り組む態度を身に付けさせ、主体的に学ぶ生徒を育成していきたいと考える。

学習指導要領によると、「主体的な学び」とは、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」と示されている。問題解決学習において、生徒が学ぶことに興味や関心を持ち、授業への参加意欲を高めるためには、生徒の必要感や知的好奇心を引き出すような課題設定の工夫が必要である。そして、自分で調べて考えて、問題を解決するためには、学習方法を工夫しながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげようとする態度を育てることが大切である。そこで、今年度は、知りたい・できるようになりたいという意欲を引き出すような課題設定はどうあるべきかを重点的に研究することとし、「基礎・基本を身に付け、主体的に学ぶ生徒の育成～生徒の意欲と必要性を引き出す課題設定の工夫～」を本校の研究主題として設定した。

２　研究のねらい

生徒の必要感や知的好奇心を引き出す課題設定の工夫をすることによって、授業への参加意欲が高まり、主体的に学ぶ生徒の育成につながることを明らかにする。

３　研究仮説

生徒の必要感や知的好奇心を引き出す課題設定の工夫について研究することにより、学習課題に対する生徒の興味・関心や解決しようとする意欲が喚起され、主体的に学習に取り組もうとする態度を育成することができる。

４　研究内容

(1)問題解決学習を通した生徒の主体性を引き出す工夫
　ア　生徒の意欲と必要性を引き出す課題設定の工夫
　イ　生徒の自己調整力を高めるための振り返りの工夫
(2)基礎・基本を定着させるための指導の個別化
　ア　学ぶことに困難さを抱えている生徒に対する支援の工夫
　イ　生徒が学習方法を選択・模索する場面での支援の工夫
(3)特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり
　ア　授業のユニバーサルデザイン化
　イ　短学活での認知トレーニングの導入

５　研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	内容・概要等
5	23	教育指導課訪問
7	5	授業参観週間①(~ 7/20) 　全教員が授業参観シートを準備し、授業を公開。お互いに授業を参観し合い、参観後は授業参観シートに感想等を記入して提出。
11	27	授業参観週間②(~12/15) 　１回目と同様に実施。

(2)一般研修

月	日	内容・講師・場所・概要等
4	27	小・中ジョイントスクール研修会①　中学校の授業の参観、全体会、分科会
8	2	要請訪問（一般研修等支援） 講師：教育指導課　馬渡　正仁　主任指導主事 内容：問題解決的な授業づくりについて
8	18	小・中ジョイントスクール研修会② 講師：是川縄文館学芸員　　場所：是川縄文館 内容：是川石器時代遺跡についての講義および展示見学
11	20	小・中ジョイントスクール研修会③　小学校の授業の参観、全体会、分科会

６　研究の成果

(1)生徒の意欲と必要性を引き出す課題設定については、毎時間設定することは難しいものの、先生方が発問の仕方を工夫するなどして取り組んだ結果、生徒の「課題に取り組んでみたい」という意欲を、少しずつではあるが引き出すことができた。

(2)授業のユニバーサルデザイン化については、スライドを作成してモニターに表示したり、実物投影機を用いて説明したりして、生徒が視覚的に確認できるよう工夫した。また、生徒が活用しやすいワークシートづくりや形式のテンプレート化によって、どの生徒も授業に取り組みやすくなるようにした。

７　研究の課題

(1)生徒の自己調整力を高めるための振り返りの工夫については、時間の確保が難しく、十分に行うことができなかった。来年度は、効果的な振り返りのあり方について先生方が学ぶ機会を作りたい。また、生徒の自己調整力を高めるために、別のアプローチはないか探っていきたい。

(2)学ぶことに困難さを抱えている生徒に対する支援については、スモールステップで取り組ませたり、教え合いやＴＴを活用したりしたが、困難さにかなり上下の幅があり、どうしても作業が遅れてしまう生徒がいたため、十分とは言えない。全体指導が多く、なかなか個別への支援ができなかった。

(3)短学活での認知トレーニングは、全校で取り組むことができたが、トレーニングでできたことを日常生活で生かすことが難しい。一定の効果を得るためには、今後も継続して取り組むことが必要である。

（記入者　増田　美保子）